昭和42年度

春山合宿

報告書

そして

山岳部

について。

信州大学山岳会
長野山岳部

春山合宿を終えて

L.L. 吉安尚夫

今合宿が無事終了したことを喜びたい。計画段階において少々もたつきもしたが，全員のエネルギーを出しあい，準備は終った。勿論，都合により準備途上において他部員に余計なエネルギーを消費させた部員もいたが，それは，他部員の協力という点でカバーできた。カバーしてもらった部員は感謝せねばならない。

全行程を終えたという事は，すなわち，全員の気力が充実していたものと思われる。そこには，他人を，批判する前に自らの行動により示した諸君の努力があったからと察する。

小さい事をあげればつきない，個人のミスは，今後決して，行なわないようにしてもらいたい。

各係の自主的な態度，個人の自主製に期待した今回の合宿に80%の成果を得たと思う。残る20%は，余りにも好天すぎ，厳しさという点において欠き，ルートファインディング，その他において いくつかの不安があげられる。

今後の課題として，取りくんでいただきたい。

1つの山行をステップとして，進んでいくのが大切である。求められるのでなく，求める姿勢で。

3月22日

5:00 起床
6:00 出発
6:45 / 7:05 1ピッチ ワッペをつける
7:55 / 8:05 2ピッチ
9:05 / 9:25 3ピッチ
10:20 / 10:30 4ピッチ
11:35 / 12:15 5ピッチ、デポ地点回収
1:20 / 1:30 6ピッチ
1:40 鳥帽子小屋着

今日は稜線をがんばるがシゴかれる。しかしすばらしい天気となり稜線の風が快よかった。テン場も出来、小屋の屋根で昼寝をする。
やっぱり春の稜線はすばらしい。皆の顔色がちがう。

3月23日

4:30 essen起床
5:30 essen
7:00 出発
7:40 / 8:00 ミツ岳下
8:45 / 9:00 2ピッチ
9:45 / 10:05 3ピッチ 野口郎 昼食
11:10 / 11:20 4ピッチ
12:10 / 12:35 5ピッチ 東沢乗越
13:20 / 1:30 6ピッチ 水晶小屋下
1:58 水晶・ブリモ岳コル着

稜線歩き。最初ペースが合わずでシゴかれるが、やっぱり山に来てるんだと思う。アイゼンのきく稜線歩いていても疲れを忘れさせてくれる。風も冷たくなく。しかし赤岳の登りはかなりショッパい。天気が良かったから何ともなかったが。
明日は双子でかスムーズに行く感である。
天気は良し。

3月24日

4:00 essen起床
6:40 出発
7:30 / 7:40 スバリ岳ピーク
8:45 / 9:00 2ピッチ 三俣蓮華小屋
7:50 / 10:00 3ピッチ
11:05 / 11:15 双六岳・三俣蓮華岳分岐ピーク
12:05 双六小屋着

1ピッチ目は風が強く春山だと思っていたが三俣に来たらガスが濃くなり、ルートが解からなかったが、ルートはハッキリしている。トラバース道を行くが途中より尾根を登り稜線へ出る。これがきっかった。双六はキラなすばらしい場所である。

3月25日

沈殿

風雪ちょっぴり強く笠まで長いし、まだまだ日数は充分天気を待ちましょう。
一日中ギャンブルで終る。テントのラッセルもたいしたことはなかった

3月26日

沈殿

今日も沈殿と決定、天気図余りよくない。またまたギャンブル。ボケそうだ。
テントの外は大分雪が積っている。50cmはあるだろう。

3月27日

4:00 essen起床
6:20 出発
7:10 / 7:20 1ピッチ
8:20 / 8:30 2ピッチ
9:15 / 9:25 3ピッチ
10:10 / 10:20 抜戸岳ピーク
11:15 / 12:10 笠小屋より笠ガ岳アタック、昼食

天気図より想像出来ない上天気である。笠までは長い。思ぬラッセルにシゴかれる。槍・穂高連峰を見ながらのプロムナードは何ともいえない気分である。シゴかれました。

1:00 ～ 1:10 ～ 板戸岳

2:05 ～ 2:15 ～

3:05 ～ 3:15 ～

4:00 テン場着

3月28日

4:00 ~~essen~~ 起床
5:00 ~~essen~~
6:10 出発
7:00 ～ 7:10 ～ 硫黄乗越到着
8:00 ～ 8:10 ～ 2ピッチ
9:00 ～ 9:10 ～ 西鎌槍上部
9:45 肩小屋着
10:10 〃 発
10:40 槍ピーク
10:50 〃 発
12:00 肩小屋着
12:45 〃 発
1:35 ～ 1:45 ～
2:30 ～ 2:40 ～
3:30 ヌタ入テン場着

蒲田川より、暖い風がガスを運んで来ては定くない。北鎌も槍も全然見えない。すぐ西鎌尾根である。きびしい登りもある。しかし気快調。槍のピークに立った時、足下はガス、頭から上は青色の空、何ともいえないロマンチックな情景だろう。帰りはスカッと晴れる。2・3時間前のガスがうそのようだ。
残るは下へ下への道だけだ。

3月29日

4:00 ~~essen~~ 起床
5:00 ~~essen~~
6:40 出発
7:25 ～ 7:35 ～ 1ピッチ
9:05 ～ 9:25 ～ 2ピッチ
10:15 ～ 10:25 ～ 3ピッチ
11:15 ～ 11:30 ～ 4ピッチ
12:10 新穂高温泉

下山。何のあっけないようだ。下りはミリーセードばかり。下に行くにしたがって暑くなる。ナダレの跡が新しい。ほとんどがトラバースの道路である。一番こわかった。新穂高温泉がみえてからの遠いこと。10日ぶりに土の上にテント張って何かなつかしかった。ごくろうさま。

3月30日

5:00　eason起床

6:00　eason

7:30　出発 バスで

10:30　飛騨古川駅

解散

6、各係の反省

◇気象係　　大谷敬

結局今回の合宿もなにもやらずじまい。少々天気図の読み方が甘かった。吉野が上層天気図を取っていたが、大変役に立つようだ。これから皆で勉強したりどうだろう。

◇装備係　　吉野英夫

合宿が終って反省したい事は次にあげるような点であります。

1. 竹ザオを忘れてしまった事、部屋にあったのに忘れてしまったという事は、大変悪い事である。合宿前は全員忙しいはずである。しかし、そこで冷静さを欠いていたことは自分自身非常に反省しなければならないことである。

2. 出発直前、つまり入山の朝 駒井宅を出る時、時間の少ないのに気をとられ、忘れものをしてしまったことである。
忘れ物ばかりが目についてしまった。これは自分自身ばかりではなく、全員が何か合宿前で疲れていたせいかもしれない。
結局、自分自身がしっかり反省して今後このような事が少ないようにしたい。

3. 入山中、ピッケルが折れてしまったが、これはテント撤収の時であり、ある面ではしかたがない。
しかし、こればかりは我々の知識では予知することは不可能である。
事故が無かったことでよかったと思います。

◇医療隊　　大野照幸

今合宿でやった怪我，使った薬。
渡辺が胃薬を1袋飲んだが，あの食いぶりで病気にならなかったのは奇跡といおうか！
靴ズレ，マメ，ザックズレが2～3名いたが赤チンを塗る程度だったでもこのような事は，靴に履きなれたり，packingを良くしたりすることで大部分防げると思われるので，最低このようなことからなくしていこう。

7. 春山合宿反省と山岳部について。

◇山と責任　　大谷敬

山へ行く時「責任」ということがよく考えられる。歩いている時でもよく話される。果して責任とはどんなものであろうか。
山では全責任はリーダーにあるといわれている。だがこんな場合はどうであろう。パーティーは稜線を歩いていた。風は強くはなかったが突風が吹くことがあった。少し急な斜面の下りになった時，1人がアイゼンをひっかけ転倒して滑落していった。
この場合リーダーにどんな責任があろう。アンザイレンすれば滑落しなかったかも知れない。だがリーダーが判断したのである。「これなら大丈夫」と。これから先は各メンバーの責任の範囲になるのではないだろうか。

◇合宿を終えて。　　小林元紀

全員が無事下山出来たことが何よりもうれしいことでした。しかも計画通り行動出来ました。天気も思いのほかよかった。考えてみれば極く自然の事のようにも思われます。しかしままならぬところが山のよいところの一つ

だろうか。今回はちょっとスムーズにいきすぎた感もなきにしもあらず，そういう点ではちょっと張りあいがなかったような気もしています。ブナタテからガスの切間に見た稜線のすばらしかった事，言語に絶します。まつこと悪順環です。

ガスる西鎌の稜線も又，不安にさせたり，血をおどらせたり，と，ブナタテの本々に映る苔も雨しずくをいっぱいにあび，水々しく，色っぽかった。双々の稜線で肌をさすような風にも身がひきしまり，心が浄化するようでした。槍のピークからの青空，その上にすだすだ何かありそうでした。

いずれにしろ日本の山は小っちゃい，気の遠くなる程歩きに歩いて，すだすだピークは雲の彼方だったような山はないだろうか。

◦山岳部における合宿　　吉野

我々は，登山とは何か？大学山岳部というものは何か？また信州大学山岳部をはどのような方向に進むべきか？ということを山岳部活動を行っている途中において考え，話し合ったことがあるだろうか。

山岳部とは山の好きな者が集まり，山に登ろうとする集団である。しかし，山登りといっても いろいろの方法があるし，また対象とするものも異ってくる。そして各個人によっても考え方が異って来る。しかし，山岳部においては，それが本当に理解された人間によって活動されているかは疑問である。しかし，我々は山に登ろうとしている。何の為，どんなことを得たいのか，何を知りたいのか……，このような最も身近に在る問題ですら自分自身ではっきりとつかもうとしていないし，それをつかもうと努力も

していない。これは非常に難しい問題である。そのためにか、それから逃げている、その答がどんなものかは解からない。しかし、さらに一歩進んで考えてみると、それは我々が山登りの為に山岳部という集団をつくっているということと、そして仲間をつくって互いに協力して山に行く。

我々山岳部とは、山を知らない者が第一歩から始めるところである。山は危険であり、困難である。そして、山はその頂をきわめるのには、種々の条件、困難を克服せねばならない。一つの山を考えれば、長いアプローチがあり、草原あり、森林あり、さらに尾根、沢、岩壁、雪、氷……等、それぞれ異った山登りの方法を用いなければならない場所がある。ここで我々の山登り、つまり大学山岳部の活動という意味はどんなものか、それは人間形成の場として、さらにオールラウンドの山登りであると思われる。オールラウンドの山登りといっても、純粋に登山ということを考えれば、上記のような山というものを、全ての、あらゆる条件の下においても我々が登れるかを養成することであり、またその他には、我々が山に登る時、その行為だけに終るのではなく、いかに考えて登るか、山での生活において互いの結びつき、精神的な人間関係というものが得られると思う。

山登りをするために、また出来るために登山の基礎技術を取得し、自分のものとするのが山岳部である。その他、我々大学生の置かれている場(社会的にみて)、それはより高度な学問の追究であり、また社会に対しての指導的な面を持っている。理論ではなく、現実に対し、自分の力が発揮できなければならない。

学問の追求は個人であり、それを社会に持って出た時、まずオーに人間集団における互いの関係がある。社会集団において、自分を伸ばし、さらにその集団を発展させる為には集団と個人というものの関係が重要である。これは理論でも理解できるかもしれない、しかし、実際に体で理解しなければならない。それを得る場として、大学の課外活動としてのサークルがあり、また我々の山岳部も同じである。
ここで標題にある、山岳部における合宿というものに関連して考えてみたい。
我々が山岳部においての山行を合宿という名前で表わしている。山岳部においての山行は合宿が主体となっている。合宿とは何であろうか、これは我々部員がオールラウンドな登山技術を取得する場であり、それを伸ばす場であり、我々の山に登りたいという欲求を満たす場である。同じ山行でも、技術的な差のない者同志の場合には、ただ欲求を満たすだけの山行は出来るかもしれない。しかし、山岳部という集団においては、各人によって技術面、体力、経験……等が異っている、その者たちが集まって山行を行うのが山岳部においては合宿となる。メンバーの構成には一年生、二・三・四年生と部歴が異っている、そして、山といっても困難さにおいて程度の異ったルート、山域というものがある。そして一つ一つの合宿においては、全ての参加者が技術の取得が出来、それを伸ばせて、さらに、山岳部のもとめているものを満足させるのである。つまり山岳部における合宿においては、部員全員が満足するものでありたい。しかし人間は互いに性格、考えが種々である。それをいかに一致させて活動していくかが、山岳部の運営である。我々の部は、ある程度かすと

まりがある。しかし，各自が合宿に参加する場合，自分から進んで行くという態度の不足がみられる。さらに下界での部活動というものにも影響している。山岳部においての活動は前記のように，合宿で代表される山登りと，下界での山岳部としての活動の二面を持っている。しかし，我々は誰れもが山に行きたという欲求があり，また山岳部とは山に登る者の集団である。そこで我々としては，合宿ということを重要視するべきである。そして，いままでに記したように合宿は登山欲求を満たすものであり，さらに広く，未知な，困難な山に行く為の技術の修得，訓練であると思う。現在の部は各自が余りにもやりたい事，行きたい山……等，自分自身の欲求の満足の為に活動している。これは他人の尊重の上から良い事なのか？　山岳部という集団において生活しているのである，部員全ては自ら入部してきたはずである。集団においては，それを維持する為の規則，習慣，秩序というものがあり，それの無いものはもはや一つのクラブではなく，部というものは存在しなくなる。自分の欲求の満足を得る時，なるべくエネルギーを消費しないで……，という考えである。各自が種々異った考えというものを持っていると知りながら，あえて知ろうとしかない。そして性格のちがいであると簡単にもたずける，よくないことである。もっともっと互いに話し合う事が必要である。自分を客観的に見る事が必要である。信大山岳部は現在過渡期である。それは表面的な社会的な面である。我々の本質である山登りは変らないものである。形式・運営が変っていく時，何か，もう一歩前にある山岳部の存在・登山の

本質というものを見失いがちである。
我々は常に客観的立場に自分を置き，広く目を向け，種々の事を考え，それが一つのまとまりとなるように自分自身で考えたいもの，ムードによって左右される様ではいけない。これでは自分自身の人間的成長は小さなものであり，山岳部という特長が失われていくようだ。山岳部は同好会では無い，サロンではない，さらに一歩進んだ人間集団であると考える。それは人間同志が何か結びついるものを持っている。それ無くて真のチームワークを持った登山が出来るだろうか。それは疑問である。しかし，山とは自然の所有する最もバラエティーに富んだ場所であり，それは一面我々にとって美しくも見え，非常な厳しさを持っている。その山にいくとき，我々は安全に，しかも充実した山行をするようにしているのである。前記の様な事を忘れ，自分の欲望だけの合宿にしようとすれば，危険は増し，事故を起こすことは必然である。
山岳部の合宿とは本番であり，試合に勝つ，負けるとは異り，生命すでに影響する。このような事を考え，自分の置かれている社会的立場を考え，我々の進む山岳部，その中における合宿の持たれ方，方向を考えたい。
《序論》終り。

思想と行動

太野照幸

皆、もっと山に登ろう！合宿だけで満足しているようではだめだ、我部に於いては合宿に参加する時、他人が御膳立てしたのを、食べるような気持で入る奴が多い、でもそんな山行ならやめて、個人山行を持った方がはるかに良いだろう、つまり、思想を持たない行動も、行動の伴わない思想であっても、だめなのである。

山岳部とは1つの組織である、集団である。各部員はその中の1員である。この当然なことを忘れては何をやってもうまくいくはずがなく、山岳部はCLUBであって義務の場ではない、自分達から自発的に入って来た所である。

初めは団体意識がなくても次第に覚めるだろう、その時その意識を無視してもCLUBを続けられるだろうが、行づまる時が来る、そんな状態を打ち破るのは平素から自分がその団体をどう考えていたかによって決まる。

つまり唯単に合宿を行なった、山に登った、だけではいけない。いつも、常に、SACについて、大学山岳部について等を考えて行動していなければならない。

編集後記

報告書が出来ましたが、標題にあるような原コウが少ないのは残念。